



サド侯爵夫人とその夫

式場隆三郎

書肆心水

目次

はしがき……… 9

サド侯爵夫人

悲劇の発端……… 12

1 2

必死の闘い……… 35

3 4 5 6

マドモワゼル・ルーセ………

7 8 9 10 67

試練に立つ聖女……… 101

11 12 13 14

自己犠牲を貫いて……… 134

15

愛の異端者 サード

孤独な異端者	146
逃亡する女	155
悪の陶酔	163
時代粧	177
血と肉と	184
怖るべき芸術	194
英雄と天才	210
愛の異教徒	220
年譜	223
あとがき	230
注（書肆心水）	233

サド侯爵夫人とその夫

凡例

一、本書は式場隆三郎著『サド侯爵夫人』（一九五六年、鶴書房刊行）の改版改題復刻版である。復刻に際して左記の表記調整をおこなった。本書の書名「サド侯爵夫人とその夫」は内容に鑑みて本書刊行所が新たにつけたものである。

一、送り仮名を現代的に加減した。

一、「にさん」と読む「二三」など、読点を付加したところがある。

一、鍵括弧の用法は現今慣例によつて調整した。

一、読み仮名ルビを付加し、なくもがなの読み仮名ルビは削除した。

一、明らかな誤記誤植はそれと示すことなく訂正した。

一、まれに混在している旧字体の漢字は新字体のそれにおきかえた。

一、「わたし／私」など、目立つ表記ゆれば統一した。

一、疑問文の文末に「？」のある場合とない場合が混在しているので、「？」がなくとも疑問文であることが明らかな場合は「？」を句点におきかえた。

一、本書刊行所による短い注記は「」で括つて文中に挿入した。

一、本書はサド研究未発達の時代のもので、誤った事実認識の古いソースによつているところがある。そのうちサドと妻に関し特に問題となるべきものに限り、本書刊行所が＊印をつけて注記した（巻末収録）。

はしがき

サド侯爵（マルキ・ド・サド）として知られるドナチアン・アルフォンス・フランソア・ド・サドは、一七四〇年パリに生れ、一八一四年に七十四歳でシャラントンの精神病院で死んだ。病的性欲における加虐性の症状をもつた人で、サディズムは彼の名からでたものである。

夫人のルネ・ペラジーは一七三九年に生れ、一八一〇年に七十歳で死んだ。夫人はあの横暴無類の変質者の作家サド侯に、よくかしづいた、まるで天使のように純情の女性だった。

こんなに両極端の性情をもつた夫婦も珍しい。加虐嗜好症の始祖として、いまは世界的有名になつたサド侯に對して、心からの愛情と、やさしさをもつてつかえたサド夫人の生涯は、失恋物語以上の悲劇であつた。

サド侯は不倫の罪の刑罰として長い牢獄生活をしなければならなかつた。しかもこの至純の夫人を虐げつづけたのである。その暴戾無比な良人を恨まず、ひたむきに愛しつづけた夫人は、いつも変らぬ深い愛情で獄中の良人をまもり、血の滲むような手紙を寄せるのだった。サド侯の生涯は精神病理学の立場から分析せねばならぬ異常なものであるが、夫人の性情は素直で純情で、まことに名婦の名にそむかないものといえる。

わたしはサド侯の伝記とともに、その犠牲になつた夫人の伝記を世におくりたいのである。

しかし、サド侯夫婦の波瀾にとんだ生涯を、たんに獵奇的な興味から取り扱いたくはない。わたしの態度はこの本を読んでもらえれば、わかると思う。

わたしは愛情の変性がこのように高度にまで及ぶ場合のあることを証明し、分析することもに、そのようにひどい良人をもちながらも、少しも悪い感化をうけず、ますます純愛を深め、良人の兎も角も残な愛情が常態にもどることを祈りつづけた稀有の女性の生涯を讃えたいのである。

おしなべて、サディストの相手は、マゾヒストである。このコンビがますますサディストの症状を強め、愛の暴虐を逞しくさせるものだ。

しかし、サド夫人の場合はまったくちがう。彼女は素直でやさしいが、マゾヒストらしいところは少しもない。つまり夫人は良人から虐げられることをよろこび、わざとそのように仕向けて愉しんでいるようなところは少しもない。彼女の精神は、全く健全であつたと断定してよい。

この夫婦の生涯は、いつの時代の男女にとつても、その愛情生活の反省の鏡として役だつと思う。ことに女性解放の歴史的時代ともいふべき現在、サド夫人の行実の記録は十分味読さるべきである。

あえて、この書を世におくる所以である。

サ
ド
侯
爵
夫
人

悲劇の発端

1

謹啓

サド伯爵並びに伯爵夫人は今般子息サド侯爵をマドモワゼル・ド・モントルイユと結婚いたさせることと相成候、ついては両人の結婚式に御来駕の榮を賜りたくこのだん御願い申し上げ候

敬具

一七六三年五月のこと、慣例を重んずる儀式ばつた人々が、黒づくめの礼服の腰に短剣をつけて、両家の親戚知友のところへもちまわった案内状は、こんな文面であった。婚礼はその月の十七日にサン・ロック教会であげられた。新夫のサド侯爵は二十二歳、新婦ルネ・ペラジーは二十三歳であった。ルネは決して美貌とはいえなかつた。だが、いきいきとした眼によつて明るさを与えた顔には、やさしさと内気な愛らしさがあり、その下には、彼女自らはまだ知らなかつたけれども、うちふるえる熱烈な魂を示す情熱的な素質がひめられていた。じっさい彼女は娘時代を、きびしい母親のしつけのもとに、厳格な環境のうちにすご

してきて、その日までまったく世間を知らない深窓の処女であった。そして彼女は、表面的な観察だけでは「平凡な女」と断定できても、注意ぶかく検討すると、反対に興味ある素質、不器用と決断力の混淆、極端な率直さの相、集中された情熱が認められるような女であった。彼女の父はロオネイの領主であり、会計検査院の総裁であるコルディエ・ド・モントリュ氏である。このルイ十五世の信任のあつい、謹厳で博識な高官は、どちらかといえば妻であるマリー・マドレーヌ・マッソン・ド・ブリセイの尻にしかれることを、むしろ欣んでいたようである。したがって、妻の方が実際には家族の支配者であり、モントリュ氏は万事につけて夫人の意志に従うように習慣づけられていたので、娘のこの結婚を希望したのは、いうまでもなく総裁夫人であった。

こうして選ばれた三国一の花婿、若きサド侯爵とは、いつたいどんな人物だったか。

サド家はモントリュ家に劣らぬ、南仏プロヴァンスの名門である。十四世紀のはじめ、イタリアの桂冠詩人ペトラルカは、老騎士ユウグ・ド・サドの若い愛人の美を讃え、ひそかに聖女ラウラとよび、その抒情詩集「カンゾン・シエール」を献じた。つづく数世紀のあいだ、この神のような詩人の名とともに知られた名家からは、タラスコンの領主、牧師、司法会議員などの高位顕官が輩出した。王朝は累代の功績をねぎらい、フランス貴族の象徴である鷲の紋章を与えた。十八世紀に入つて、僧正、元帥、提督、牧師長があらわれ、一門はいよいよ栄えた。

愛
の
異
端
者
サ
ド

孤独な異端者

ルネの従順さは、カトリシズムの教養から来ていた。

わたしの感情は、きっとあの世でもあなたの感情でおおわれることでしょう。だからこそ、あなたというお方がいとしく、無限に慕われるのです。もし、あなたがほんとうに正しい信仰をおもちになれば、神さまはきっとお恵みをえて下さるでしょう。あなたにつけよい信仰の力を与えて下さるように、わたしはいつも祈りをささげております。

といった彼女の心、それは夫人が生きた時代の姿ともあまりにかけはなれていたようだ。彼女がみようとしなかつたけれど彼女の祈った神々は、じっさいは血にかつえていたのだから。サドは夫人のみなかつた世界にいた。そして、そんな夫人の手紙に激怒し、憎悪した。

憎悪とか陰鬱性とかは、またそのものの素質と教養によつて深さを異にする。サドは教養があつたから、その憎悪は世界観的な根拠をもつていた。その時代の唯物主義、肉欲主義、無神論なども、こうした根拠に立脚した反抗の哲学で、それらは調和と拘束の世界観に向つ

てあくまで抗争した。ドイツのある作家は、これら十八世紀の反抗的哲学を病理学的に蒐集分類し、「人間は邪悪だ」という表題を与えた。彼はその著書の第一頁を「サドはヨーロッパ文化の略血である。」という文章で書きだしている。

サドは、抗争の哲学を代弁した一人である。彼の名は、先覚者ではなかつたにしても、最初にそれを唱えた人々のなかに数えられる。彼はルソーのロマン主義に対立して、自然主義の父であった。彼は見たままの真実以外は、語らない男だった。パリの魔窟で経験したり、獄中で体験したりしたものを、彼は一流の炯眼と憎悪をもって書いた。

彼は、比較的ノーマルな人間として、出獄した。彼が狂人であるという説は、信じがたい。その狂暴や狷介は、血に飢えた憎悪心がそだてあげた、獣的な欲求にすぎない。彼は手近の妻を犠牲者としてえらんだ。感情の世界に隸属した生きものとして、彼はその妻を憎んだのである。

思想的ラディカリズム、エロティックな幻想、古代史の耽読などが、著作と循環的に交代した。サドの獄中作にノーマルなものが多いのは異とするところだが、忽ちにして荒れ狂い、忽ちにして収まるというのが、彼の特性ではなかつたか。

彼の最初の作品は、たいてい戯曲であった。一七七二年、彼がマルセユ事件でミオランに拘禁されたとき、その喜劇がはじめて脚光を浴びた。もつともそれ以前にも、プライベートに上演されたらしいが。一七八八年、バスチーユで『ある作家の手文庫』という脚本が書

かれ、その一部はコメディ・フランセーズに捧げられた。

ちょうどその頃、哲学的小説『アリースとヴァルクール』と、戯曲『オクシティールン』が獄中で書かれた。上梓されたものにくらべれば、未発表の作品ははるかに多かった。そのなかには、韻文もかなりある。一七九〇年代の彼の作品は、たいてい上演されている。おそらく、彼はその創作活動の大部分を牢獄でおこなったのであろう。

この事実は、サディズムの父として教えられた肖像のほかに、もう一つの彼の肖像があることを告げている。彼の人格のなかには、作家である一人の男と、エロティシズムの陰惨な世界に遊ぶ一人の無頼漢とが住んでいたのだ。

彼は戯曲ばかりでなく、長短さまざまの小説も書いている。フランス中世期の物語詩を扱った数種の短篇などは、なかでも代表的な名作である。一八〇〇年すなわち六十歳の彼が精神病院に送られた年に、『恋の罪、あるいは情熱のよろめき』と題して発表された四部作のなかでは、ジュリエットとローネの物語がいちばん傑作であった。それは十六世紀におけるユグノー戦役を背景とし、新教徒とカトリシズムの闘争に取材した歴史小説である。

ジュリエットは、新教徒の頭目カステルノーの娘で、二十歳になる。彼女は使者となつてグレイス公の陣営におもむく。公は彼女に懸想するが、ジュリエットにはローネという相思の婚約者があるので、にべもなく撥ねつけられる。公は娘の父を襲撃して婚約の破棄をせまり、

あくまで意に従わせようとする。父親は「われは生きながらえり、わが命はわが背後にあり」といつて、この犠牲を拒否する。そこで女は、恋人に愛の試練を所望する。

ローネは、わが身を犠牲にせねばならぬ立場になる。そうすれば、彼女は彼のあとを追つて死に、父親は自由の身となるだろう。ローネのヒロイックな意氣に感じた勇将グレイズは、いさぎよく断念して若い二人のために結婚の労をとる、といった筋である。

この短篇において、サドはフランス人特有の雄弁的なパトスで、偉大な犠牲的感情を讃美した。新教徒迫害の恐怖、ギロチン、放火犯、溺殺、血に酔える軍隊、アムボア広場の拷問、女官たちといっしょにそれを見物するカトリーヌ・ド・メディシス。これらは、いずれも主題ではなくて、背景であった。彼は次のように、教訓的な一節を加えてこの物語を結んでいきる。

諸君よ。同胞の運命をその手に握る諸君は、このような例に従して、人間の魂が高貴な興奮へと移りゆくさまを知られよ。束縛、監視、虚偽、断頭台という権力は、けつきよく奴隸を生み犯罪を育てあげる以外の何ものでもない。ただ忍耐だけが、心を照し輝かすばかり。それを獲得せよ。徳性を語るものだけが、人の心に徳性をさます。

これは前に述べた『アンリエットとサン・クレール』や『ドルチ』と同じく、イギリス風

あとがき

終戦直後の昭和二十二年に、わたしはマルキ・ド・サドの伝記『愛の異教徒』を出し、つづいてサド侯爵夫人の伝記を出した。こんどその二冊を圧縮して、この叢書の一本にまとめた。全篇に手をいれ、面目を一新したつもりである。

戦後サドの作品の翻訳や評論が二、三あらわれたようであるが、まだまとまつた研究はない。この十年以来の社会情勢のなかにおけるサド的な現象は、精神病医にも社会心理学者にも注目すべきものが多い。われわれはもう歴史的なサディズムそのものは、問題にしていない。もっと変性した形における病症を指摘せずにいられないのである。

この本が示すのは、その起源をなしたサドとその夫人の行実である。しかも、これとて やはり時代相が大きな背景をなしている。したがって、この夫婦を単独にとりあげてみても、アルコール漬けの標本のように死物にすぎないことになる。彼らはあの廃頬と動乱の時代に生き、その稀有な特性をあざやかに示したのであった。そして、二十世紀の後半、もはや原子力が大きく世界を、いや宇宙をも動かしつつある時代にあって、どれほどの意義があるか。それを考えるために、わたしはこのふたりの人間を問題にしたいのである。

精神分析学派のメスをつかうまでもなく、サド的なものとマゾ的なものとの交錯は、現代

社会のなかにふかくくいこんでしまつてゐる。ノイローゼの流行と平行し、あるいは混淆して、この二つのイズムが潜在してゐるのは否定できない。親子のもつれ、夫婦のもつれ、政党のもつれなどのなかに、現実的なサディズムの一因がはいっていないか。

変態の愛情物語や好色読物を期待してこの本を手にした読者は、失望するだろう。しかし、ノイローゼや各方面の不調和、不和、もつれなどの社会的現象の解明に熱心な読者なら、考えさせられる多くのものを発見してくれるだろうと信じてゐる。サドの世界はフランスであったが、その研究はドイツがもつともさかんで、医学的にとりあげたのはクラフト・エビングであった。しかし、わたしはもはやその病理学をもう一度紹介する必要はないと思う。それよりも、ここまで進んできた現代社会のなかに、消えやらず、むしろますます強くなつてゆくサド的精神と、それによつてなされる行動に注目したいのである。

余談にはなるが、一九五二年の七月九日に南仏プロヴァンスで、サドの旧居を訪ねた。ゴッホの遺跡をしらべにサン・レミイへ行つたわたしは、もと彼が入院していいた精神病院のいまの院長ルロア博士の案内で博物館をみにいった。そこには古代ローマ時代のものや考古学的なものがたくさん陳列してあつたが、一九五一年にそこで、ゴッホの、ここの病院に入院中の作品と、アルル時代のものだけの展覧会があつたという。この博物館はシャトオで、かつてのサドの旧居であつたことをルロア博士からきき、わたしはまるで縁のないようみえるサドとゴッホがつながつてゐることを知つて、感慨にふけつたものである。三十年来ゴッ

本研究に精進し、サドのことも少しく研究をすすめたわたしが、その旧居に数時間をおくる
機会に恵まれたことを、ここにしるしておきたい。

一九五六年一月八日

式場隆二郎

注 (書肆心水)

以下の注において使用した引用文献は次の二著作である。

前者を「濵澤本」と略記し、後者を「ボーヴェール本」と略記する。

・濵澤龍彦著『サド侯爵の生涯』

(新版、二〇二〇年改版中公文庫、中央公論社刊行。初版、一九六四年、桃源社刊行)

・ジャン＝ジャック＝ボーヴェール著『サド侯爵の生涯Ⅰ』

(長谷泰訳、増補版、二〇一二年、河出書房新社刊行。初版、一九九八年、同社刊行。原書、一九八六年)

・ジャン＝ジャック＝ボーヴェール著『サド侯爵の生涯Ⅱ』

(長谷泰訳、二〇一二年、河出書房新社刊行。原書、一九八九年)

・ジャン＝ジャック＝ボーヴェール著『サド侯爵の生涯Ⅲ』

(長谷泰訳、二〇一二年、河出書房新社刊行。原書、一九九〇年)

ボーヴェール本の引用における「」の部分は、引用に対するボーヴェールの注である。

*注1 ルネ・ペラジーのその妹の名前は、アンヌが正しい。サドとアンヌの出会いについては以下の引用を参照。

式場ガルイーズと記した事情もボーヴェール本の引用から察せられる。

・濵澤本八五～八六ページからの引用。

『アンヌ・プロスペル・ド・ローネー嬢はルネより五つか六つ歳下の妹である。正確な出生年は分らない。幼いころから彼女は修道院に入れられて育った。だから公式の記録には「尼僧会員」^{シヤノワニス}という肩書がついている。修道院といつても、当時のそれは上流家庭の娘を多く擁した、いわば花嫁学校のごときものであつたらしく、院内の規律も極度に弛緩^{シカク}していた。昔のような厳格なものでは決してなかつた。修道女たちの生活ぶりも、ほとんど俗世間のそれと変りなく、唯一の禁止は院外へ出ることであつた。これらの修道院のなかには、かなり風紀の悪いものもあつて、たとえばサドが『ジュリエット物語』のなかに描いていたパリのパンテモン修道院のごときは、幾多の醜聞をまいた実在の修道院であり、ゴンクールの『十八世紀の女性』にもその名が見えているほどである。ともあれ、姉の夫と係りをもつようになるころには、すでにローネー嬢は修道院を出て、俗世間の生活にもどつていたようである。

侯爵が一七六九年以前に、義妹に対して特別な関心をはらっていたとは考えられない。ひろく流布した伝説によると、サドは初めてモントルイユ家を訪問した日、姉よりも男好きのするローネー嬢のすがたを見て、たちまち彼女に恋心を燃やし、むしろ彼女を嫁にほしいと意中を表明したが、まず姉のほうを最初に縁づかせたいと考えていたモントルイユ夫人が、このサドの要求をしりぞけ、無理やり彼に姉を押しつけてしまつたのだそうである。しかし、この説にはまったく根拠がない。無責任な伝説の作者はボール・ラクロワで、わが国でも式場隆三郎氏の伝記がこれに依拠しているが、近年フランスでとみに盛んになつた考証的研究は、このような愚劣な三文小説的臆説を断固として否定しているのである。

といつても、ローネー嬢に関する資料は極端に少なく、彼女がいつからサドの情婦になつたかを正確に知ることは、今日では不可能に近い。彼女と義兄とのあいだに交わされた書簡は、一通も残っていない。家族の名誉を傷つける惧れのある証拠物件を残すまいとして、モントルイユ夫人が手紙の類をことごとく焼き捨ててしまつたらしいのだ。もちろん、ルネ夫人はかなり以前から、二人の親密さに気づいていたにちがいない。一七七一年秋に

ローネー嬢がラ・コストにきて、姉夫婦と一つ屋根の下に暮らすようになった経緯は、わたしたちには測りかねるが、諦めに徹した従順なルネ夫人が、夫と妹とのあいだの不倫な感情の動きを黙認していたのではないか、ということを考えられる。』

• ポーヴェール本I巻一三四〇—三九ページからの引用。

『サドの十九世紀的な伝説では、彼の結婚は邪魔の入った恋が一番の中心になるロマンティックなドラマとなる。ドナシャンはモントルイユ家の娘たちのなかのある妹を恋しているのに、双方の家族から長女のルネ・ペラジーとの結婚を強いられ、満たされない気持のままにいやいやその結婚をしたにすぎなかつたろうということになる。そうした美しい恋物語は、依然として一九三九年のジャン・デボルドの本にも現れる。およそ五十年前からそんな作り話の間違いを明らかに証明するあらゆる資料があるというのに、ノーマン・ギアードナルド・トマスによる伝記のような、比較的最近の、とはいえばとんど信頼できない英語系の伝記にまでその作り話がまた見つかる。そういう伝説はある口碑に頼つたもので、その口碑はポール・ラクルワ、通称愛書家ジャコブもしくはポール・ルイ・ジャコブによって、その記事「サド侯爵の二件の刑事訴訟に関する真相」(『パリ評論』、一八三七年、第三十八巻)のなかで、初めてこと細かに記された。そのテクストを、ほぼすべてのサドの伝記作者らがモーリス・エーヌでさえも参考にした。イヴァン・ブロッホの本にはかなり的確なその要約が示されている。わたしの考えでは、それをここに引用しておくことは重要である。なぜなら、それによつて、わたしたちがサドの実人生について知つていることと、いたつて早期にサドの生前からその実人生を掩蔽しだした伝説との差が、はつきり測定できるから――

〔租税裁判所長官モントルイユ氏はサド侯爵の父と古くからの永い友情で結ばれていた「結婚の三か月前はたがいに面識はない」。長官にはふたりの娘がいた。一方は二十歳、片方は十三歳、ふたりとも同じよう